歩兵第十六聯隊とガダルカナル島作戦
【第１回】

元新発田駐屯地援護室　佐藤　和敏

昭和十七年八月七日午前四時三十分、ツラギ発「敵猛爆中」の第一報に続いて、「敵の多数船団は、有力なる航空部隊及び護衛艦艇協力のもと、ガダルカナル島及びツラギに奇襲上陸し、現地警備隊は苦戦中」六時頃には「ツラギ守備隊は最後の決意を為す」との悲報電が入った。

聯隊は当時ジャワ島に在り、後日ガダルカナル島に進出して、同島撤収まで約四ヶ月、島争奪に死闘を繰り返す運命の因となすものであった。

聯隊主力は、第一次船団(六隻)によってショートランド島を出航、昭和十七年十月十四日午後、二回に亘り二十数機の攻撃を受け若干の被害はあったが、同日午後十時、タサファロング泊地に入泊した。

翌十五日明け方後、敵機爆撃のために、笹子丸、九州丸、吾妻丸の三隻は午後九時頃炎上擱挫し、兵員、弾薬は約十分の一、糧秣は約二分の一を揚陸したに過ぎなかった。

更に、揚陸した軍需品は我が部隊の決死的処理にもかかわらず、敵機の銃爆撃及び艦砲射撃のため、焼却されるの悲運に際会しガダルカナル島に上陸した。

十月十五日午前八時、命により師団主力に追及することとなった。

第二師団長は十月十四日夕、タサファロングに戦闘指揮所を開き、速やかに兵力を集結し敵を撃破するため、川口支隊と那須支隊を交代させた。

然るに、敵機の行動、海岸道、勇川付近に対する砲撃は六日朝より活発となり、七日朝にはマタニカウ正面の敵は、爆撃に続き砲撃を開始し、歩兵四聯隊(仙台)の損害は甚大となり、歩兵二十九聯隊(会津若松)主力とその他を、那須部隊(歩兵四聯隊が主力)に増加したが戦況意の如く進展せず、敵は右岸に進出するに至った。第二師団の第一線(歩四、歩二十九)は後退余儀なく、攻勢拠点及び砲兵陣地を失った。

ガ島に於ける軍の現有兵力は、川口支隊(極めて微弱)、第二師団(歩兵四聯隊は三分の二の損害)の歩兵五個大隊、野戦砲六門、十二榴弾砲二門、十五榴弾砲四門に過ぎず、軍需品に至っては極めて微々たる物であった。

七日以来の戦況の変化と第二師団戦力の低下等、十月中旬頃までに飛行場を奪回せよとの中央部の要求もあり、軍はルンガ飛行場の迂回急襲作戦を採用するに決した。

聯隊は十八日朝、勇川河口を出発、丸山道(迂回路)は対空遮蔽の考慮から樹木の伐採を避け、徒歩部隊の通過を基準として約五・六メートルの幅に雑草を啓開したもので、急坂も多く給水はマタニカウ河、ルンガ河上流以外に求め難く、行軍は容易ではなかった。

各隊は、糧秣、弾薬を背負い一列となり前進したため、戦闘は朝出発しても後尾は午後となる状況で、重火器運搬は著しく遅れ、山砲は途中で放置するやむなくに至った。

十八日、日没より師団はルンガ河を渡ったが、同川右岸の地形は予期に反し高低甚だしく、各隊の行動は頗る渋滞した。

師団の諸隊は二十一日早朝、集結地を出発し展開線に向かった。然るに地形険難言語に絶し前進は頗る遅れた。部隊は泥濘の中を日没に至るも月光を利用し前進に努めた。

師団長は諸種の状況で二十三日に攻撃決行を延期した。しかし、右翼隊(川口部隊)の集結意の如くならず、さらに一日延期。二十四日午後七時決行を予定した。

この頃歩兵十六聯隊は、逐次師団戦闘指揮所付近に集結しつつあった。聯隊は、師団の第一回総攻撃では予備隊となった。

【第一回総攻撃】

第一線の両翼隊は全力をあげて敵に緊迫したが、地形は依然として起伏大きく森林の密度も益々濃厚となり、地点の標示も不可能となり、午後三時頃よりは豪雨のため各隊の前進を著しく阻害した。

日没後、森林内は全くの暗黒となり方向維持も困難となった。予定時刻に至るも豪雨は止まず困難を極めた。右翼隊川口部隊は、午後九時十五分突入したが、不成功に終わった。

左翼隊那須部隊、歩二十九基幹は、午後十時三十分頃、敵第一線陣地を強行突破し、戦果を拡張しつつ敵陣深く突入したが、爾後状況不明のまま二十五日天明を迎えた。敵銃砲火は益々熾烈となり、敵機の離陸飛翔する姿を認める状況にたち至った。

師団長は、被害は甚大であるが、歩二十九聯隊が軍旗を捧げて陣内に突入しているのでこれを見捨てるに忍びず、又飛行場攻略の責任を全うするの決心で二十五日夜、全力をあげて夜襲を決行することとなった。

【第２回総攻撃】

歩兵第十六聯隊は、左翼隊長、那須少将指揮下に新たに増加展開し、聯隊方面に重点を保持し決死的夜襲を決行した。

聯隊は日没と共に行動を起こし、途中敵迫撃砲の射撃を受け、大隊長、聯隊旗手を始め多数の負傷者を出したが前進を続行し、二十六日午前三時前、敵陣地第三線鉄条網に遭遇する頃的の察知するところとなり、熾烈なる迫撃砲・機関銃の射撃を受け将兵の過半数を失った。

時既に天明に近く、聯隊長は直ちに機関銃をして敵の側防火器を制圧し、第二大隊に当面の敵陣地を強襲せしめた。

第三大隊は、途中にて分進し敵陣地を攻撃中、突入直前、鉄条網付近に於いて猛火を受け、大隊長、中隊長死傷し多数の将兵を失い一先ず態勢を整え、爾後の攻撃を準備するに至った。

主力正面(第二大隊)は、天明と共に敵火愈々熾烈を極めるに至ったが、聯隊長は依然攻撃を力行した。聯隊長は陣頭指揮中重傷を負い、将兵もまた死傷続出、再び態勢を整え更に攻撃を続行する事になった。

この二十五日夜には、遂に那須少将が戦死。聯隊長、広安大佐は重傷後戦死した。太平洋戦争での将官の戦死は那須少将が最初であった。

ガ島戦当時、聯隊副官であった野田孝次大尉(四年の長きに亘り四代の聯隊長に仕え、太平洋戦争中最も困難な時から、終戦後復員するまで聯隊を牽引し、髭の副官として慕われた)によると、聯隊長は私に第三大隊の夜襲状況を確かめ、促進する様督励を命じたので、傍を離れ主力と別れて第三大隊の方に急進した。一人一人を追越して前に出ようとあせった。将兵は無礼な奴が勝手に前進していると思って咎める者もいたが、聯隊副官だ！連絡のために前に出る。と答えつつ前進した。

時間は相当経ったがまだ前進は続いていた。こんな事でどうなるのだろう、まだ夜襲隊形に入っていない。私は焦りを覚えた。暗夜で時計も見えず、無論灯火類は一切厳禁であったが、今思うと十二時か或るいは過ぎていたかも知れない。

突如として前方及び右前方に大音響が聞こえ、ズシン、ズシンと地響きがした。次いで私の付近も前後左右砲弾の霰だ。こんなすごい目にあったのは初めてだ。敵の迫撃砲に違いない。一心不乱で右に左に避けた。もう前に出るどころではなかった。

敵はジュウタン攻撃というか、狙い撃ちではなく地域に対しめくら滅法に砲弾をばらまいているのだろう。私の付近に将兵の姿は目にはいらない。敵は我の突入より先に、先手を打って猛射を浴びせてきたのだ。もはや避けるのではなく、只無我夢中に逃げまどった夜襲は再び不成功に終わった。

聯隊主力の安否が気にかかり、砲弾の来ない安全と思えるジャングルの方に回り、主力の方と思しき右側方向に急いだ。ぽつぽつ本部の将兵に会うことが出来たが、皆バラバラで組織の形態は保たれていなかった。これは容易でない大損害を受けたに違いない、聯隊長はどうしただろうか、軍旗はどうなったのか

間もなく本部の間島兵長が私に声を掛けた「副官殿、聯隊長殿も旗手殿もやられました。軍旗は私が腹に巻いて下がってきました」と報告を受けた。

軍旗の全部、旗周囲の房と御紋章、竿、石突を確認した。戦局推して知るべし、せめて軍旗が安全であった事がなによりであった。

とりあえず後方の安全地帯と思われる師団司令部までさげて、暗号係りの水沢少尉に臨時旗手として守護せしめた。

生残りの将校や下士官が自分の所属隊員を探し出し、時が経つにつれ把握できた。一番の大事は聯隊長の収容であった。

絶対優勢な敵火力を前に、昼間は到底成功の見込みはないとすると、夜間以外に手段はないが識別が極めて困難である。ただ特色として水筒・拳銃・図嚢をかけ、脚は巻脚絆でなく革脚絆で、下士官と区別がつく。その他は体格が小柄の方で、一番決めては口髭で、それを手探りに依り確認するほかなかった。

我々の行動地域は敵前数十メートルと予想されるだけに、準備も念入りにし規制も強くした。亀岡中尉以下援護のもとに、私が三、四人の下士官と共に鉄条網を破って侵入し捜索した。進につれ味方将兵の戦死体にぶつかった。そこで愈々匍匐前進にはいった。

倒れている戦友の数が多くなる。奇跡的に生存している者や、重傷で動けない者も或いは居るかと思っていたが、全く見当たらなかった。私たちは早々口髭を求めて将兵の顔を撫で回した。繰り返し、繰り返し捜したが聯隊長らしい人には当たらなかった。

一旦援護隊の所まで帰り、亀岡中隊長の手を借り二十名による捜索を開始した。敵前近くで金具にぶつかったのだろう、カチン、ガチャンとかすかな音がした。

夜襲には敏感で厳重な警戒をしている敵はこの音に気づき、猛然と射撃して来た。小銃

機関銃で雨霰と撃ってきた。敵とは至近距離にあり、曳光弾も交じって飛んでくる。しかし弾道は高い、落ち着いて見れば曳光弾は我々の為には都合がよい、方向、高低も判断できた。出来るだけ低く腹ばいになり、速やかに現場を離脱した。不成功に終わったが損害もなかった。

再度決行すべきか、これであきらめるか、成功の見込みがないとすれば残念ながら打ち切るほうがよい、不面目のことにもなるがよく考え直して、決行しない決心をした。

思えば二十五日昼間まで、元気だった聯隊長以下各第隊長・中隊長や下士官・兵に至るまで、一晩にして失ってしまった。大きな損害であり、犠牲であった。と回想している。

ルンガ飛行場の夜襲は完全に失敗した。右翼隊は殆んど突撃の実行を揚げ得ず、全力を以って突撃に協力は出来なかった。

突撃に任じたのは、歩兵二十九聯隊と我が歩兵十六聯隊のみであった。しかも一回に一個聯隊ずつ突撃に当たった。この夜襲で、聯隊の死傷は、聯隊長以下将兵千五百名以上出した。

聯隊は、十月二十六日午前六時「左翼隊ハ一時攻撃ヲ中止シ、ルンガ上流旧師団司令部展開位置付近ニ至リ、第一線部隊ヲモッテスル敵トノ離脱ハ、本二十六日夕トス。各隊ハ、自ラ患者ヲ後送スルヲ本則トス」との師団命令を受け、三十日頃までに、ようやく集結を完了した。

師団長は、左翼隊にその編成を解き、聯隊は十一月一日以降逐次後退を開始した。この間将兵は殆ど絶食の状態で、疲労その極に達し、負傷者の収容後送もまた困難を極めた。

（新発田聯隊史より）